



Title: ホームページが変わりました

中央図書館の増設工事は増設部分の杭打ち工事が始まりました。今の杭打ちってドスンドスンという音と振動がないのですね。

工事期間中の駐車場減のため、毎月恒例の中央図書館「おひざにだっこのおはなし会」は、10月から来年の3月まで、中央公民館の児童室に会場が変わります。毎月第3金曜日の10時30分開始は同じです。どうぞお間違いなく。

❖十五夜の月

先週の9月15日は十五夜でしたが、皆さん翌16日の月は見ましたか。どちらも真ん丸に見えましたが、16日の方が輝きは強かったと思います。家人に「きょう（16日）の方が満月なんじゃないの」と言ったら、「何言ってるの、気のせいだ」とにべもない返事。そう言われると俄然気になります。

9月15日は旧暦（陰暦）で8月15日。陰暦で15日は満月というのが一般的な理解です。ところが月の満ち欠けの一巡り（朔望周期）が29.53日であったり、月の軌道が楕円で公転速度が変化するために、どうしてもズレが出てきます。で、9月の満月の瞬間はなんと17日の4時5分。16日の夜の月の方が明るいと感じたのは間違いなかったのです。

以上の調査結果を意気揚々と家人に告げると、返ってきたのは「フーン」の一言だけ。いやもしかして「フン」と言った？年中行事に水を差してはいけない、という教訓を得た一幕でした。

❖ホームページが新しく

大館市立図書館のホームページをリニューアルしました。新担当のSが仕事の合間にコツコツ作り上げたものです。見た目がスッキリしました（当館比）。使い勝手も良くなっていただければいいのですが。

これが完成形だとは思っていません。利用者の皆さんの力もお借りして、より良くしていきたいと思えます。お気づきの点がありましたら、どうかご遠慮なくお知らせくださいますように。

トップページの館名の下には24本の樹木が並び、上には小鳥が飛んでいます。これを見ると、吹奏楽部出身のわたしの脳内で音楽が鳴ります。行進曲「ON THE MALL」、日本語タイトルは「木陰の散歩道」。ニューヨークのナショナル音楽院でドヴォルザークに師事した作曲家・指揮者のE・F・ゴールドマン（1878～1956）が、セントラルパークの遊歩道（モール）を歩き交う人々の姿を描いた作品です。中間部（トリオ）では、1回目「ラララーラララー……」と声だけでメロディを歌い、繰り返しでは口笛で、という楽しい曲。そういえば樹木の24本も、オクターブ12音の長調短調を合わせた数と同じですね。

❖ミシマ社のこと

出版産業と書店業界の低落傾向は相変わらず歯止めが効きません。それでも、こんなご時世に出版社を興す人も後を絶ちません。出版社というつつい講談社とか小学

館などひとにぎりの大きな会社を思い浮かべますが、ほとんどの会社は中小企業で、資金と流通の問題さえクリアできれば起業自体はなんとかできるらしいのです。地方出版の雄として知られる秋田市の無明舎出版のあんばいこう代表は、どんなに繁盛しても従業員は4人までにとどめたお陰で生き残ったと語っています（YOMIURI ONLINE「戦後70年語る秋田人」、2015年5月24日）。続けるコツはむやみに人を増やさないことのようにです。

大手出版社で編集者をしていた三島邦弘氏が2006年に立ち上げたミシマ社という出版社があります。社是は「原点回帰の出版社」。書店の利益も考えると書籍流通は原点に立ち返るしかない、全国の応援してくれる書店と直取引を行っています。また、幸い内田樹や万城目学、益田ミリといった売れっ子が応援してくれているので、社業は順調のようです。当然ながらコンテンツと編集者の能力も原点なのでしょう。

大館市立図書館の各館合わせてミシマ社の出版物は12点所蔵しています。個人的におすすめは、『THE BOOKS 365人の本屋さんがどうしても届けたい「この一冊」』（2012年）と、『THE BOOKS green 365人の本屋さんが中高生に心から推す「この一冊」』（2015年）でいずれも比内図書館所蔵。書店内ポップの拡大版といった感じで、理に訴えるプロの書評と違い伝わってくる熱量が大きいです。それから三島社長の著書『計画と無計画のあいだ「自由が丘のほがらかな出版社」の話』（河出文庫、2014年）もおすすめ。これも比内図書館です。（陽）